

青森県民の犬飼育意識調査から考察した今後の課題

入交眞巳^{1)†} 中西コスモ¹⁾ 渡辺 宏²⁾ 松浦晶央¹⁾
 山崎 淳¹⁾ 大西良雄²⁾ 甫立孝一¹⁾

1) 北里大学獣医学部 (〒034-8628 十和田市東23番町35-1)

2) 青森県動物愛護センター (〒039-3505 青森市大字宮田字玉水119-1)

(2010年9月16日受付・2011年4月21日受理)

要 約

本研究はペットとして飼われている犬の飼育者に対して、犬飼育に関する意識調査をアンケート方式において行った。青森県内に住む犬飼育者を対象に29の設問のアンケート用紙を動物フェスティバルや動物病院で配布し、471名の犬飼育者から回答を得た。回答者の7割は女性で、年齢は30～40代が多く、家族とともに暮らしている人が9割を占めた。犬飼育の理由としては、自分か家族が動物好きだからが5割以上を占めた。不妊去勢手術に対し75%が賛成しているが、実際に処置している飼育者は4割弱であった。飼い犬に所有者明示をしている人は3割できわめて少なかった。獣医師会や環境省の啓発にもかかわらず、不妊去勢手術実施や所有者明示の割合が少なかったことから、獣医師は地域社会に対しこれまで以上に正しい犬飼育の教育と啓発を行っていくべきである。

—キーワード：動物愛護センター，犬，所有者明示，不妊手術，アンケート調査。

----- 日獣会誌 64, 721～727 (2011)

コンパニオンアニマル（伴侶動物）として動物が人の生活の身近な所にいるようになったのはきわめて古く、古代エジプト時代や中国の皇帝時代にすでに動物が人間の生活のそばにいたことが知られてる [1]。今日においても人は、産業動物や、補助・使役動物、伴侶動物としてのみならず、ステータスシンボルとしてなど、さまざまな形で動物飼育を行っている。2003年に行われた内閣府大臣官房政府広報室の世論調査報告書によると全国のアンケートに答えた成人2,202人のうち、ペットの飼育が好きとした人の割合は65%以上と報告されている。

ペットフード協会による2009年度の調査では、国内の犬・猫の飼育頭数合計は約2,234万3千頭であった。現在伴侶動物として最も多く飼育されている動物は犬であり、その飼育率は18.3%、次いで猫が11.2%となっている。

このようにペットと一緒に暮らすこと、ペットを飼育していること自体が一般化してきている現在であるが、ペットにまつわるさまざまな問題点も指摘されている。内閣府の2003年調査における問題点は、捨てられる動

物が多い（61%）、最後まで飼わない人がいる（30%）、他人のペット飼育により迷惑を被る（29%）、ペットの習性を知らないで飼っている（27%）などである。青森県動物愛護センターの調査でもペットの習性、行動、正しい飼育法を知らないためにペットが病気になったり、望まない妊娠をしてしまったり、糞尿や鳴き声などから近隣の人とのトラブルが生じてしまうことが報告されている（青森県動物愛護管理推進計画書2008年版）。

本研究では犬の飼育者へのアンケート調査を通して犬飼育に関する青森県民の意識を把握し、県民の犬を飼育する上での状況を把握し、ペット飼育者に対して獣医師や獣医療従事者が何をすべきかを検討することを目的とした。

材料及び方法

調査対象：母集団は青森県及び近隣県に在住の犬飼育者とした。

調査方法：犬の飼育者か否かを口頭で確認し、犬飼育者のみにアンケート用紙を配布し、回答協力を依頼し

† 連絡責任者：入交眞巳（北里大学獣医学部動物資源科学科動物行動学研究室）

〒034-8628 十和田市東23番町35-1 ☎0176-24-9377 FAX 0176-23-8703

E-mail : irimajim@vmas.kitasato-u.ac.jp

表1 犬飼育についてのアンケート調査の際に用いた設問

1	あなたの性別、年齢を教えてください。(性別と年代の選択式)
2	現在同居している人はいますか。
3	同居している人のうち、70歳以上の人はいますか。20歳未満の人はいますか。
4	あなたのお住まいの都道府県、市町村を教えてください。
5	犬を飼っている理由は何ですか。あてはまるものを一つ選んでください。
6	飼い犬を去勢・不妊することについてどう思いますか。(賛成か反対を選ぶ)
ここから下は飼っている犬の飼育期間が長いものからすべての犬に関して答える	
7	犬種を教えてください。
8	犬の性別、年齢を教えてください。
9	犬の体重を教えてください。
10	狂犬病ワクチンを毎年接種していますか。
11	犬を登録していますか。
12	混合ワクチンを毎年接種していますか。
13	フィラリア(寄生虫の一種)の予防をしていますか。
14	どこで飼っていますか。(屋外、屋内、両方から選ぶ)
15	給餌は1日何回ですか。
16	散歩の頻度はどれくらいですか。
17	犬の特性を知った上でその犬にあった手入れをしていますか。
18	犬は平均で1日のうちどのくらいあなたや家族と遊んでいますか。
19	しつけをしていますか。
20	犬の飼い主が誰だかわかるように住所・電話番号などを明示したものや、マイクロチップを装着させていますか。
21	犬に去勢または不妊手術をしていますか。
22	しつけをしている人に、どのような方法でしつけていますか。 (ご褒美をあげる、叱る、チョークチェーンを使う、等の選択式回答)
23	所有者明示の欄で「いいえ」と答えた方のみ、所有者明示をしない理由は何ですか。
24	不妊手術の欄で「はい」と答えた方のみ、不妊手術をする理由は何ですか。
25	不妊手術の欄で「いいえ」と答えた方のみ、不妊手術をしない理由は何ですか。
26	どのような飼い方をしていますか。 (外で放し飼い、つなぎ飼い、屋内のみ、サークルの中のみ、日中は外で飼育、などの回答選択式)
27	犬は主にどこで寝ていますか。
28	犬の食餌は何を与えていますか。
29	具合の悪くなった犬をいつ動物病院に連れて行きますか。(すぐ、様子見てから、等)

た。アンケート依頼の際にアンケート回答用紙の取り扱いについて文章と口頭で説明し、個人情報の保護に関するインフォームドコンセントを行った。アンケート調査用紙配布は①青森県十和田市内にある5つの動物病院、②青森県動物愛護センター、③青森県八戸市内のショッピングセンター、④北里大学獣医学部の学園祭の4カ所とした。

調査項目：アンケート調査用紙には29の設問があり、調査項目は(表1)①飼い主の基本属性(性別、年代、住居のある県など)、②犬飼育の際に行っている事柄(ワクチン接種や不妊去勢、所有者明示など)、③犬飼育に関する意識に関して(犬飼育場所や不妊去勢手術の賛否など)などとした。

調査期間：2008年8月22日から10月末までとした。

統計処理：SPSS 17.0(エス・ピー・エス・エス株、東京)の統計処理ソフトを使用した。カイ二乗検定を行い、有意水準は5%とした。

成 績

アンケート回収部数は471部で内訳は男性110人

(23.4%)、女性345人(73.2%)、性別不明が16人(3.4%)であった。年代は、女性は30歳代(111人、32.4%)が、男性は40歳代(29人、26.4%)が最も多かった。飼育頭数は1頭のみ飼育している人が341人(71.9%)、2頭以上飼っている人が102人(21.5%)であった(無効回答31人)。飼育されている犬種は41種であり、そのうち雑種が26.1%で最も多く、次いでミニチュアダックスフントが14%であった(図1)。同居人がいる人は443人(94.1%)と高い割合を示し、そのうち25.5%の人が70代以上の人と暮らし、53.5%の人は20歳以下の子供と暮らしていた。犬の飼育理由としては、「自分が動物好きだから」と答えた人が34.4%と最も多く、次いで「家族が動物好きだから」が23.1%であった(図2)。飼育場所に関する有効回答者数440名のうち屋内飼育者は73.2%、屋外飼育者は18.9%、屋内・屋外両方での飼育者は8.0%であった。

不妊手術を施すことに関しての賛否は「賛成」76.7%、「反対」15.1%、「決めかねる」7.2%であった。手術の賛否における男女の意識においては男性の方が反対する傾向にあった($\chi^2 = 4.5, P = 0.1$) (図3)。不妊去勢手

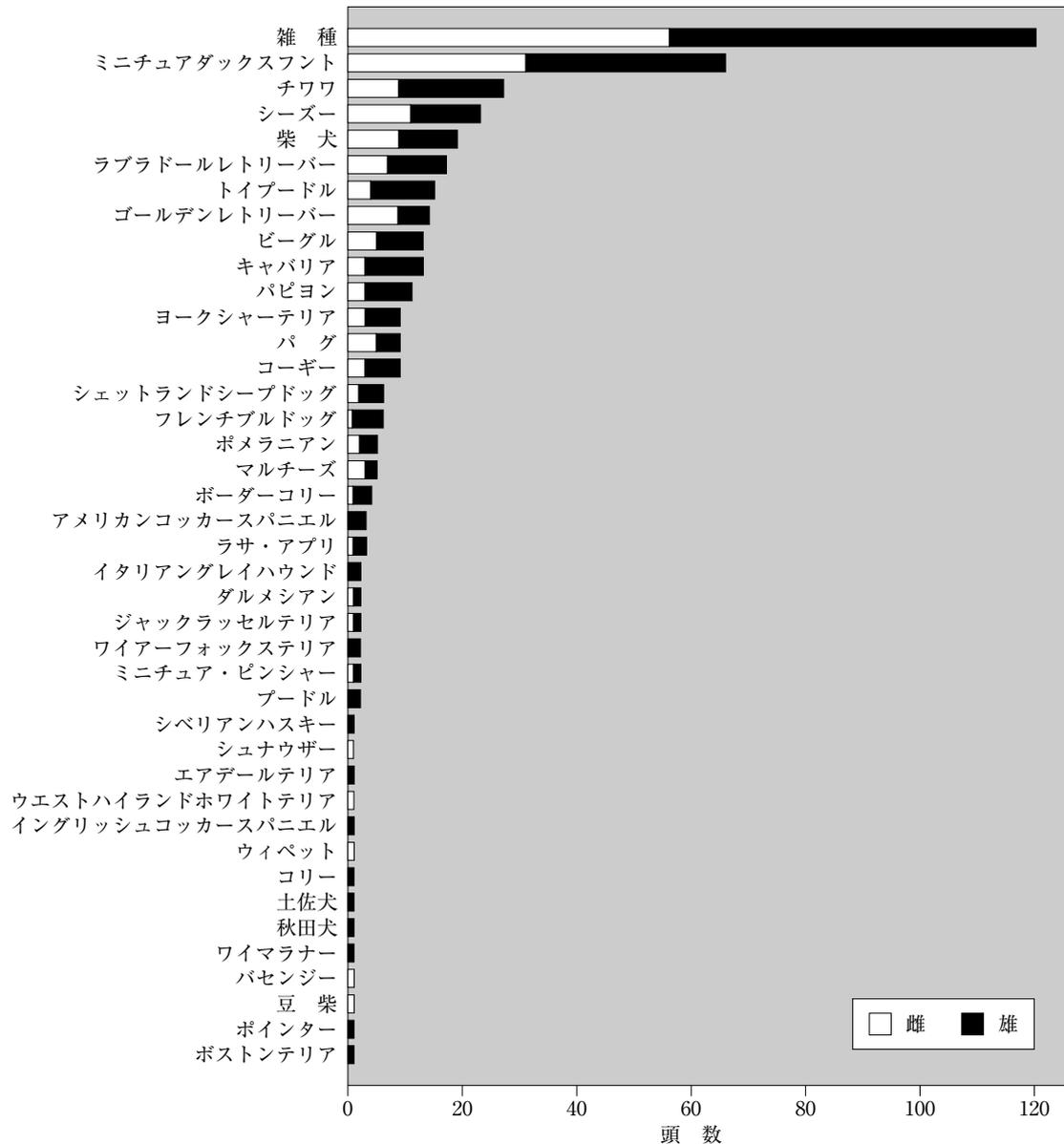


図1 アンケート回答者の飼育している犬種と全体の頭数

術に対して賛成と考える人は多いが、実際に飼い犬に不妊去勢手術を施していた人は39.5%，していない人が54.4%であった。手術に対して賛成意見の人のうち実際に飼い犬全部に手術をしている人は48%しかいなかった。犬の性別でみると、雄で去勢されている犬は雄全体の36.2%であったのに対し、雌犬の場合不妊されているのは50%であった。雄犬の飼い主の方が雌犬の飼い主に比べ不妊手術に消極的であることが示された ($\chi^2 = 8.8, P = 0.012$)。不妊する理由として、望まない妊娠を避けるため (55.3%)，次いで病気予防のため (30.8%) と回答している。その他には寿命が延びる、精神的に安定、ストレスがかからない、とした人がそれぞれ約7%いた。不妊去勢手術をしない理由として多かったのは、「手術の必要がない」(28.3%)，次いで「子犬を産ませたいから」(22.2%) であった。「嫌がりかわ

いそう」と「これからする予定」がそれぞれ約10%で、「お金がかかる」と回答した人は212人中19人 (9%) で比較的少数であった (表2)。

狂犬病予防接種の有無を尋ねたところ、飼育している犬全頭に行っている割合が84.6% (無回答者を除くと91.5%) であった。その他混合ワクチン接種の割合は73.4% (無回答者を除くと79.8%)，フィラリアの予防処置を行っている割合は77.8% (無回答者を除くと84.8%) となった。所有者明示については、全部の飼い犬にしている人は25.5%しかいなかった。所有者明示をしない理由として一番多くあげられたのは「必要ないから」(61.8%) であり、次いで「嫌がり、かわいそうだから」が14.6%，「面倒だから」が12.3%と続いた。

不妊手術に対する賛否の意見とフィラリア予防、混合ワクチン接種、狂犬病ワクチン接種、所有者明示との関

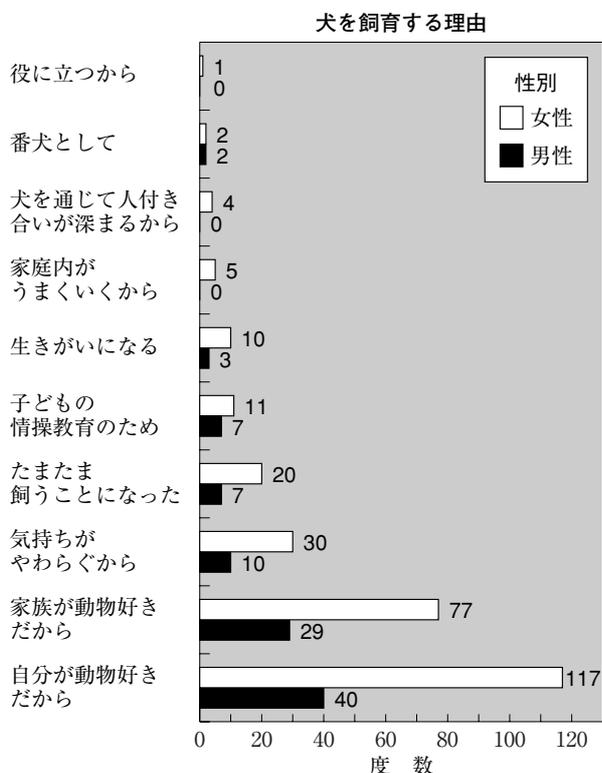


図2 犬を飼育する理由としてあげられた回答

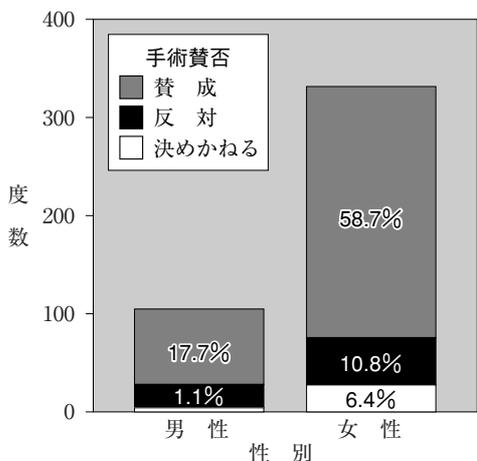


図3 不妊去勢手術の賛否に関する意見の男女の回答
男性の方が女性より反対する人が多い傾向にあった ($\chi^2 = 4.5, P = 0.1$)

係性をみると、不妊手術に反対の人は混合ワクチンを接種していない確率が賛成の人よりも高いことが示された ($\chi^2 = 7.63, P = 0.07$)。その他の項目に関しては不妊手術の賛否意見との間に有意差はなかった。

飼育場所による病気予防に関する意識の違いを見たところ、屋外飼育されている犬の方が屋内犬よりも混合ワクチンの接種 ($\chi^2 = 36.97, P < 0.001$) 及びフィラリア予防 ($\chi^2 = 24.02, P < 0.001$) のいずれも実施率が低いことが示された (図4, 5)。飼育場所による不妊手術実施有無の差はなかった。

表2 不妊手術に関する犬の飼い主の意識

質問	回答	割合 (%)
飼い犬を不妊手術することに関して	賛成	76.2
	反対	15.1
	決めかねる	7.2
飼い犬に不妊手術を施しているか	している	39.5
	していない	54.5
犬の不妊手術率	雄犬	36.2
	雌犬	50.0
不妊手術を施す理由	望まない妊娠を避ける	55.3
	病気予防	30.8
	寿命のびる, 精神的に安定する, ストレスがかからない	7.0
不妊手術を施さない理由	手術の必要がない	28.3
	子犬を産ませたい	22.2
	嫌がりかわいそう, これからする予定	10.0
	お金がかかる	9.0

考 察

本研究結果より、犬を家族で飼育している人が多く、アンケート回答者かその家族が動物好きだから犬を飼育しており、気持ちが安らぐとか情緒教育のために飼育している人よりも理由として多いことが分かった。ペット飼育のきっかけは教育や安らぎを求める前に、単に動物が好きだからという気持ちで飼育し始める人が多いことが推察される。飼育を始めた後に情緒教育となり、また気持ちの安らぎが得られることが認識されるのであろう。以上から、ペットショップ店販売員は、動物が好きだからという理由でペット飼育を始めてしまう人が多いことを十分理解し、まず動物飼育の方法や大変さを教育する必要がある。

犬や猫の伴侶動物に不妊手術を施すことに関して賛成と考える人は77%で、反対の15%を大きく上回り、不妊去勢手術に関しての理解はあるように推測されるが、実際に飼い犬に手術を施していた人は39%と低い。これは2003年度の内閣府による全国調査の21%を少し上回っているにすぎない。また、手術に賛成の人の中で実際に飼い犬に手術を施していた人は48%しかおらず、賛成という気持ちがあるにもかかわらず実際には半数の人しか手術を施していない結果となった。手術をしない理由として、本研究結果では「必要ない」が28%、「子どもを産ませたいから」が22%で、「かわいそう」や「金銭的な余裕がない」(それぞれ約10%)を上回った。また北米の研究と同様に、本研究でも雌犬の方が雄犬よりも不妊手術を受けている割合が高かった [2, 3]。北米

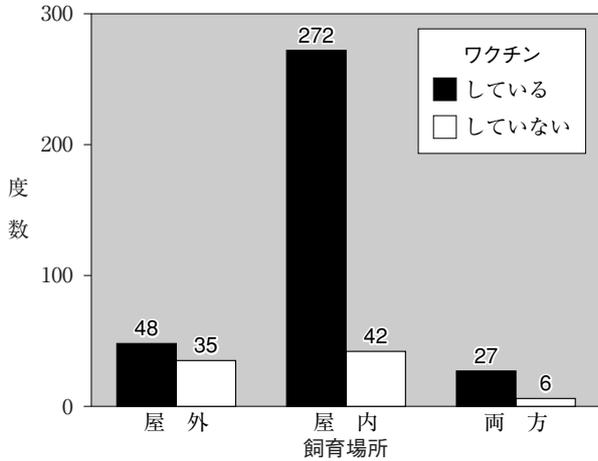


図4 飼育場所の違いによる混合ワクチン接種の有無
屋外飼育されている犬の方が屋内飼育されている犬よりもワクチン接種を受けていない ($\chi^2 = 36.97$, $P < 0.05$)

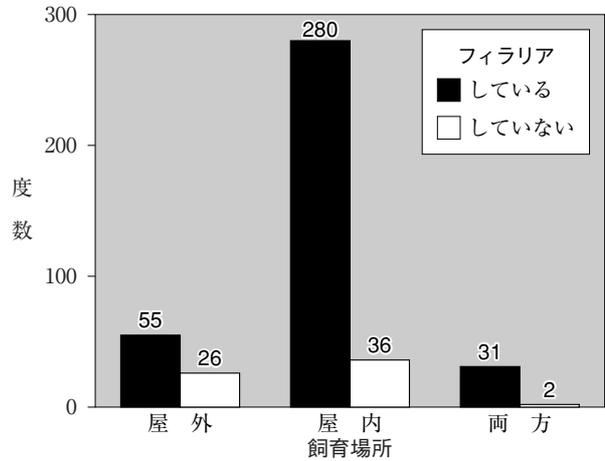


図5 飼育場所の違いによるフィラリア予防の有無
屋外で飼育されている犬の方が屋内飼育の犬よりもフィラリアの予防を受けていない ($\chi^2 = 24.02$, $P < 0.05$)

の調査研究において、その理由は調査されていないが、飼い犬が妊娠させられると困るからや、乳腺腫瘍などの予防になることが啓発されているから、あるいは、なんとなく雄の去勢はかわいそうであるから等、いろいろな個人的考えがあってこのような結果が生まれていると推測される。

不妊去勢手術実施の啓発は大切と考えられるが、その理由として、自治体で処分される犬の数が多く理由である望まない雌犬の妊娠、出産も要因の一つとして考えられていることもあげられる [4]。現在行われているような獣医師会からの経済的支援に加えて、今以上に各飼い主に対して手術の重要性と必要性に関する教育を行うことで手術実施率が上昇すると考える。本調査において男性回答者の不妊去勢手術に対する意識が低かったが同様の結果はカリブ諸島における調査でもみられている [5]。また、当研究室が2007年にペット飼育の有無にかかわらず行ったペット飼育に関する街頭アンケート（未発表）においても同様に、男性の方が女性より統計的に有意に不妊手術に反対していた。このような事実を受け止め、獣医師は犬を飼育する男性を含めた家族全員へ理解を求めていくような飼い主教育を行う必要があらう [6]。

狂犬病の予防注射を受けている飼い犬は約90%と比較的高く、またフィラリア予防は78%、混合ワクチン接種は73%と比較的高めの結果が得られたが、今後も法律に基づいた狂犬病予防注射接種の啓発を行うとともに、基本的な病気予防に関する啓発も継続、かつより一層の努力をしていくべきであらう。

ペットが逃げだした際、迷子にならないようにマイクロチップを装着するなど所有者明示をしていく働きかけを環境省と日本獣医師会が過去数年間行ってきたにもか

かわらず、所有者明示をしていない飼い主が本調査でも73%と多くみられた。2010年に発表された報告でも50%のアンケート回答者しか迷子札を装着していなかったが、その理由として「室内飼いなので必要がない」が多くみられた [7]。所有者明示に関してはまだ課題が多いことが示唆される [8]。確実にどの動物にも所有者明示を行うように獣医師並びに獣医師会が今まで以上に啓発していくことが重要であると考えられる。マイクロチップ装着数は、アニコム調査によると全国が0.07%に対し、兵庫県のみ0.2%と若干高かったのは阪神淡路大震災のあとに意識が高まったためと考えられる。したがって2011年3月の東日本大地震を機会にペットの所有者明示の重要性を再度啓発すべきと考えられる。

本調査において、不妊手術に反対の人は、混合ワクチンを接種していない割合が高いことが示された。この結果は犬を飼育しても予防などのために動物病院に行くという考えを持っていない人がいるということを示唆する。したがって地域の獣医師会が中心となって市役所、地域センター、人の病院などに犬飼育に関する啓発用ポスターを貼ったり、獣医師や動物看護師が地域の公共施設などに出向いて講演会やセミナーなどを行うことが大切であると考えられる。

近年、動物愛護センターでも犬や猫を譲渡する活動が盛んになってきているが、ここで不妊手術や所有者明示の重要性を啓発しても譲渡後は実際にその処置を施すか否かについては譲渡先の家庭の考え方にゆだねられてしまう。そこで欧州や北米のように、動物愛護センターにおいて不妊手術を施し、愛護センターへの再引き取りをなくしていくとともに [3, 9-10]、譲渡後、愛護センターから様子伺いの連絡をする際に近隣の動物病院にワクチン接種などに行くよう指導することが必要であらう。

そうすることで動物病院への来院のチャンスを与えることができ、飼い主教育のきっかけを作ることが可能と考える。また、譲渡可能な動物の不妊去勢手術を獣医学生が教員の指導のもとに実習として行い、これを臨床教育の一環としても考えていけるかもしれない。

本研究は青森県内の動物病院やスーパーマーケット、及び青森県動物愛護センターを訪れた犬飼育者のみに対する調査であったため、その結果は青森県在住の犬飼育者の意識のみを反映するものであったが、畜犬登録数と人口の割合から青森県の犬の飼育頭数はほぼ全国と同じであり、また内閣府による全国レベルの調査結果に基づく不妊・去勢手術の有無割合と比較しても数字の上で大きな違いはみられず、青森県で得られた本データは全国的な国民の意識をある程度反映していると考えられる。よって本研究で考察された事象は全国で参考にできるものと推察される。今後犬を飼育していない人を対象にしたペット飼育に対する調査を行い、国民の犬のみならずペット飼育に対する考え方や意識について調査を続ける必要があると考える。

伴侶動物とともに暮らす家庭が数を増やす中で、獣医師の役割はますます大きくなっていく。小動物臨床の獣医師と地方公務員などの公衆衛生獣医師がともに協力しながら飼い主の教育と啓発をしていくことが重要である [11]。

引用文献

- [1] Robinson I : 人と動物との関係, 人と動物の関係学, 山崎恵子訳, 1-7, (株)インターズー, 東京 (1997)
- [2] Alexander SA, Shane SM : Characteristics of animals adopted from an animal control center whose owners complied with a spaying/neutering program, J Am Vet Med Assoc, 205, 472-476 (1994)
- [3] Manning AM, Rowen AN : Companion animal demographics and sterilization status : Results from a survey in four Massachusetts towns, Anthrozoos, 5, 192-201 (1992)
- [4] Mahlow JC : Estimation of the proportions of dogs and cats that are surgically sterilized, J Am Vet Med Assoc 215, 640-643 (1999)
- [5] Fielding WJ, Samuels D, Mather J : Attitudes and actions of West Indian dog owners towards neutering their animals : A gender issue?, Anthrozoos, 15, 206-226 (2002)
- [6] Rowan AN, Williams J : The success of companion animal management programs : A review, Anthrozoos 1, 110-122 (1987)
- [7] 熊切広貴, 水田明那 : 迷子札に関するアンケート調査結果, 日獣会誌, 63, 319-322 (2010)
- [8] Looney, AL, Bohling MW, Bushby PA, Howe LM, Griffin B, Levy JK, Eddleston SM, Weedon JR, Appel AD, Rigdon-Brestle YK, Ferguson NJ, Sweeney DJ, Tyson KA, Voors AH, White SC, Wilford CL, Farrell KA, Jefferson EP, Moyer MR, Newbury SP, Saxon MA, Scarlett JM : The Association of Shelter Veterinarians veterinary medical care guidelines for spay-neuter programs. J Am Vet Med Assoc, 233, 74-86 (2008)
- [9] Lord LK, Ingwersen W, Gray, JL, Wintz DJ : Characterization of animals with microchips entering animal shelters. J Am Vet Med Assoc, 235, 160-167 (2009)
- [10] Clevenger J, Kass PH : Determinants of adoption and euthanasia of shelter dogs spayed or neutered in the university of california veterinary student surgery program compared to other shelter dogs, J Vet Med Edu, 30, 372-378 (2003)
- [11] 大西良雄 : 一地方行政における動物の福祉・愛護対策への取り組みⅢ—青森県動物愛護センターの事業の概要, 日獣会誌, 63, 583-586 (2010)

Knowledge, Attitude, and Problems of Aomori Citizens in Keeping
and Managing Dogs as Pets

Mami IRIMAJIRI*†, Kosumo NAKANISHI, Ko WATANABE, Akihiro MATSUURA,
Atsusi YAMAZAKI, Yoshio ONISHI and Koichi HODATE

* *Kitasato University School of Veterinary Medicine, Department of Animal Science, 23-35-1
Higashi, Towada-City, 034-8628, Japan*

SUMMARY

A survey was conducted to learn how dog owners in Aomori prefecture are keeping and managing their pet dogs. A questionnaire containing 29 questions and was conducted at animal hospitals and other locations. Four hundred and seventy one people responded. Seventy percent of the respondents were females. The highest age groups were in their 30s to 40s. More than 90% of the respondents live with family members. More than 50% of the respondents said that the reason they kept dogs was because their family members like animals. More than 75% believe it is "a good thing" to neuter the pets but only 40% of dog owners actually had their dog neutered. Only 30% of owners put microchips or owners' names on the dogs. Despite advertisements from veterinary associations and the Ministry of Environment, neutering pet dogs and putting identifying indications on them is still comparatively rare. This suggests that veterinary professionals should do more to advertise and educate dog owners. — Key words : animal shelter, dog, neutering, owner indication, survey.

† *Correspondence to : Mami IRIMAJIRI (Kitasato University School of Veterinary Medicine, Department of Animal Science)
23-35-1 Higashi, Towada-City, 034-8628, Japan*

TEL 0176-24-9377 FAX 0176-23-8703 E-mail : irimajim@vmas.kitasato-u.ac.jp

J. Jpn. Vet. Med. Assoc., 64, 721 ~ 727 (2011)